
月 刊

MéLange

Vol.150



2020.02.16

詩と評論

月刊「MéLange」

Vol.150 2020.02.16

「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」150号記念企画〈150字詩〉

- ①野口裕 ②岩脇リーベル豊美 ③黒田ナオ ④北村虻曳 ⑤堀本吟
- ⑥にしもとめぐみ ⑦中嶋康雄 ⑧前田雅正 ⑨大橋愛由等……………04

詩

- 幾何学……………野口 裕 06
- 呼ぶ声がする……………にしもとめぐみ 07
- 病む……………月村香 8
- くれない……………大橋愛由等 9
- 蚊取り線香の匂い……………黒田ナオ 10
- 酢酸兄さん……………中嶋康雄 13
- 忘却……………高木敏克 14
- 庭形の周りの風……………大西隆志 15

連載小説

- 2回目／「カフカ教団」……………高木敏克 03

連載エッセイ

- 「益田つこ通信 No.36 天、共に在り。一隅を照らす」……………元正章 11
- 「⑥女のみち～就職篇」……………モス堀淵敬子 12
- 神戸詞あしび 139「通史が語りかける言説の気づきと共時態の覚醒」……………大橋愛由等 16

編集部日より★70／今年鑑賞した二本目の映画は、「テリー・ギリアムのドン・キホーテ」(テリー・ギリアム監督、2018)。この映画が完成するまでのいくつかの挫折が映画の売りのひとつとしたいようだが、わたしは興味がない。セルバンテスの長編小説『ドン・キホーテ』がどのように表現されているかに関心を集中させた。今はアメリカでCM制作の監督を務める主人公トビーがロケ地であるスペインで撮影している。ドン・キホーテとサンチョ・パンサに扮した二人が風車に向かって突進する場面を撮影するものの、うまくいかない。アメリカからの撮影スタッフが「スペイン人が複雑なことを理解できない」などといった発言も出てくる。撮影がうまくいかず悶々としたとき、トビーは、10年前に映像制作学校の卒業作品として作った「ドン・キホーテを殺した男」のDVDを売りつける男と出会う。その映画は当時高い評価を得ていた。久しぶりにモノクロの自作品を見て、その映画のロケ地が、いまいる場所の近くであることを知り、バイクを飛ばして向かう。ここからが面白い。その小さな街には、10年前にドン・キホーテ役に抜擢した靴職人の老人がいまもドン・キホーテになりきっていた。トビーと再会するになり、彼をサンチョパンサと信じて、二人で旅に出ることになる。そこで次々と起るドタバタ。アメリカ映画ゆえに、冒険、サスペンス、若干のお色気、暴力、スペインに対するオリエンタリズム的な蔑視なども織り込まれている。追放を恐れて隠れ住むユダヤ教徒の村や、アラブ圏からの不法移民も混在いて、娯楽映画として愉快な作品であったことを報告しておこう。／今月の「Mélange」例会第一部「読書会」の話者は大西隆志氏。テーマは〈「プラグマティズムの散歩」のぶらぶら歩き〉(大橋愛由等記)

連載小説

カフカ教団 ② 高木敏克

僕は喫茶店カフカの女店主の話をも黙って聞いていた。彼女の端正な顔から流れてくる声はどこか変わっていた。その言葉の不思議な香りに僕は引き込まれた。川沿いの倉庫街にこんな静かな空間があることは意外だった。KAFKAの看板がある建物には入り口が二つあった。正面の大きなドアは喫茶店の入り口で、その左の入口には二階と地階に階段がつづいていて、この小さな階段が賃貸用の部屋に通じていることはわかっていて、地下のお部屋でお願いしたいのですが」

「ええ、地下室ですか。二階が空いていると思って来たのですが」

「申し訳ないのですが、上の部屋は昨日もう決まりました。女性ですし、地下のお部屋で生活ということはちょっと厳しいと思いますので、希望通り二階のお部屋にさせていただくことになりました」

「それは残念。あきらめるしかありませんね」

「あら、あきらめるのは二階だけです。下のお部屋もご覧になれば。もともとは一階ですから。地震で沈下して地下室に見えませんが」

そう言われながら、地下室を覗くことにした。

「ここでしたら、どんな看板をかけていただいても結構です」

「それさうでしょ。外から何も見えませんか。看板をかける意味もないですけど。それに運河のそばだから、やはりじめついでいますね。こんなところに地下鉄海岸線が走っているなんて、地下鉄海中線ではないか思いますよ」

「でも、そのために配水は完璧だと聞いています。それに本当の

運河はかなり深いところにあるらしい。あなたの見ているのは川面じゃなくて暗闇の表面だと思えますけど」

確かに町は闇に沈んでいた。地盤沈下で闇がせり上がって来た。時代というものはそういう形で変わっていくのかもしれない。僕はただ他人の記憶の中を生きているのかもしれない。第一、僕は地震なんて見ていないし、深い闇に眠っていたのかもしれない。本当に恐ろしいことは全て忘れていて。全てを忘れると言うことも恐ろしいことだ。地震のことを覚えているという人はきつとどこかで笑っている傍観者だと思える。地震で失う物は命や財産かもしれないが、本当に恐ろしいことは記憶を失うということなのだ。僕は何度か死にかけたことがあるが自慢にならない。何も覚えていないからだ。自殺者だって人殺しだって何も覚えていないのかもしれない。だから、お前は自殺したとか、お前は人を殺したと言われても記憶が戻ったわけではない。人の言うことを聞いて納得しているだけだ。もしこの街に本当に地震があったとしたら、彼女も地震のことを忘れていくのかもしれない。ただ、人に教えられる地震のことを知っているだけで、本当は自分が生きているのか死んでいるのかわからないはずだ。僕は地震のことを何も覚えていないのだから、死にかけたに違いない。そんなことはテレビでも見ていただろう、と何度も言われてきた。地震後たしかにテレビで地震のことは傍観していた。しかし、なんども言うが僕は死にかけたことなんて何も覚えていないのだ。僕たちはただ地震後に傍観しているだけで、それがどうして自分の記憶だと見えるのか。記憶の時間を失って、少しは「死」の意味を僕は理解できたと思っている。

◆幾何学

野口裕

直線とは言いながら
線は糸偏 だから糸
縊りあわされた細糸が糸
縊れば糸は曲線
螺旋に進む
曲線状の
螺旋に進むから
直線

そして今日も
AとBを結ぶ直線の
チヨークの
粉が舞い飛ぶ

◆呼ぶ声がする

にしもとめぐみ

鍬を差し込む
絡まった草の根をほぐす
ほろほろとした柔らかい土塊になる
ミミズ 黒光りするハサミムシ
たまにカエルが冬眠している
ふかふかの土に春を待つ
ブロッコリーにカリフラワー
つるなしエンドウに

見上げれば鳥たちがさえずる
春を待つ同志たち
おしゃべりの中身は
聞き耳頭巾はどこに

雨は毎年のように
春を呼ぶだろう
大きな 大きな風吹いて
そして あなたはどこに

◆病む

月村 香

ごませめて
シトロン入りの水を
汲んでくるだけでも
できないか

(この市日の太陽天下)

レモンティーを
持つてきてあげようか

どの葉っぱ?

わからないわ、と寝返り

白湯だけでも
飲んでごらん
薬の時間は
とうに過ぎてているのだし

…あなたの声が聞こえる

括弧の中に

入る光の大小が

この肌に落ちて

(くずおれない太陽)

◆くれない

大橋愛由等

鍛冶屋の息子は包囲された雌鹿を残滓する

(へ優しいペテン師の肩によりそうペンギンたち) 周囲から隔絶され高い壁に囲まれたその建物に入るつもりはなく一度入ったら出られないというカフカの警告もされているのだが時折内部から漏れ聞こえてくる声と声はなんだか懐かしくて亡くなった父と母がずいぶん若い頃にかわした笑い声のようにも聴こえこの建造物の中ではきつと一年中色とりどりのガーベラが咲き誇っているのだろうかプシュケーそのものも甘い香りが漂っているのだろうかと思いつつ左回りに周回するというそんな行為しかできないボクは郵便ポストに海豚と黒鷲にあてた絵葉書を投函することを思い出したのだった。へ踊り場でしゃがんでいたのは鬼だったので名札を貸してあげなくてはへ石をけりながら世界の果てまで到達できるのだろうかかと夕なずむ西の宙をながめていたらくるくるという音をたてて坂を下っていく水陸両用バスの乗客たちは愉快ではないはずなのにみな笑っていてボクに手を振ってくるので「どこからきたの」とエスペラント語で聞くと「どこからでもないよ」とミランダ語で答えたので「今日の海は波と風が形相と質料の差異について苛立っているよ」とやんわりと語り返したのにびつくりした顔をしていた。へ「あたしは良い子」と何度も繰り返されてもへ疾患を指摘されるたびにひとびととボクは周囲にだれがいるのか振り返る癖がぬげきれないので友人の友人が新月と一カ月に一度とある公園のベンチで会って隣りに座りながらなにもしゃべらず半日をすごすことをもう九年も続けていることを思い出しボクもその新月の横に座ってボクがとろとろ溶けてしまうまで黙りつづけていようと思っ

ているのだが……

◆蚊取り線香の匂い

黒田ナオ

高校二年の夏休み、私は学校の宿題をするために太宰治を読んだ。「斜陽」を読んだ。感想文を書くために読んだ。名作っぽい感じがしたから読んでみることにした。暑い暑い夏の午後、鈴蘭台駅にある穴倉みたいな本屋で買った太宰治を読んだ。蟬がにぎやかに鳴いていた。鈴蘭台駅で太宰治を買ったわたしは、ゆらゆらとゆらめく八月の滲んだ光と一緒に、微くさい文庫本のおいのする神戸電鉄に乗って、太宰治を読んだ。天井ではくるりくるりと扇風機がまわり、生ぬるい風が渦を巻いていた。その中でわたしは生ぬるい太宰治を読んだ。それから家に帰ってアイスクリームをいくつも食べた。最中アイスを食べた。宇治金時も食べた。「斜陽」は面白いのか面白くないのか、まだよくわからなかったが取りあえず、わたしは夏休み部活の帰りに太宰治を読んだ。

女の人が出てきた。旧家のお嬢さんが出てきて、突然太宰治らしい男に恋をする。なぜそんな変な人柄も良くなさそうな男をいつぱんで好きになってしまうのか、高校二年のわたしにはさっぱり解らなかった。しかしとにかくわたしは、暑い夏の午後「斜陽」を読んだ。「津軽」「人間失格」「走れメロス」「晩年」「道化の華」「富嶽百景」「女生徒」「グッドバイ」と次々に読んでいった。むしやむしやと食べるように読んだ。神戸電鉄のぬるい扇風機の風の中で読みながら、ああ死にたい死にたいと男が泣きごとを言うのを聞いていた。

家に帰ってから読んだ。畳にごろごろ寝転がって読んだ。蚊取り線香の煙のせいで目が痛かったが読んだ。部屋じゅうに蚊取り線香の

古びた甘い匂いが漂っている。それは怪しくていやらしい匂いだった。わたしはこの匂いを嗅ぐたびにいつも、頭の芯がしびれて何か悪いことをしたいと思った。しかしその悪いことがいったい何なのかはよくわからなかった。

死にたい死にたいと男は言い続けた。わたしは別に死にたいとは思わなかった。なぜ男がこんなに死にたがるのかよくわからないし、こんな情けない自分勝手な男のことを、なぜ女たちが好きになるのかもわからなかった。

蟬が鳴いていた。西瓜の匂いがした。風鈴の音がして、サイダーの味がした。その後ろからまたまたと着物姿の太宰治がついて来た。死にたい死にたいとついて来る。どこに行くのかわからないし、どこに行きたいのかもわからなかった。

同じクラスの男の子と待ち合わせをした。映画を見て、クリームソーダを飲んだ。彼は死にたいとは言わなかった。その代わりに、大学の工学部に行きたいと言った。彼は理系男子なので小説はほとんど読まなかった。でも今度、太宰治を読んでもみると言った。わたしは太宰治はあまり面白くないから、三島由紀夫か夏目漱石にした方がいいと言った。

今でも夏が来ると、ときどきふつと太宰治が読みたくなる。でも、あれから一度も太宰治を読んだことはないし、多分これからも、あれほど情熱を持って太宰治を読むことは、もう二度とないだろう。西瓜、サイダー、最中アイス、もぎたての茄子や胡瓜、浴衣、日焼け止めクリーム、花火大会、男の子との待ち合わせ。そんなごちゃごちゃとしたいろんなものたちと一緒に、八月になると太宰治がわたしのことを呼びに来る。死にたい死にたいと、耳もとで囁きながらやって来る。汗くさい微くさいにおいを漂わせてわたしを誘惑する。

◆益田つこ通信

はじめ
元正章

▼37号／「天、共に在り。一隅を照らす」〈2020.02〉

中村哲73歳、アフガンで凶弾に倒れて死す。一人の日本人医師の訃報が、全世界に駆け巡りました。その余韻は今も続き、1月25日西南学院大学でのお別れ会には、数千人もの弔問客が駆け付けたとのこと。また各地でも、様々な形で追悼会が催されていました。【益田教会でも、2月9日（日）礼拝後に行う】。多くの場合、人生はその人の死でもって終わるものですが、彼の場合、死を通して、その遺志を伝えていこうとしています。その背景にあるものとは、何か。

「天、共に在り」「一隅を照らす」。この二つの言葉は別々ではなく、彼にあつては一つでありました。「天、共に在り」とは、「神は我々と共におられる」（マタイ福音書1:23）のクリスチャン医師中村哲訳です。「これが聖書の語る神髄である。枝葉を落とせば、総てがここに集約し、地下茎のようにあらゆるものと連続する」とも断言します。「一隅を照らす」とは、「人間としてうごくまる」態度に通じ、「いま、ここに生きる」姿勢に直結します。アフガンの荒涼たる大地に身を徹したのは、慈善事業というのではなく、天意に則っているのです。『人は愛するに足り、真心は信するに足る』と、アフガンとの約束を守り通した結果です。「平和を実現する人々は、幸いである」（マタイ5:9）。

先日、書家でもある陶芸家の知人から色紙をいただきました。薄墨の円の中に、万葉仮名で「人波 人乃中天 人止奈留」と筆書きされました。「人は 人の中で 人となる」。そのためには、「インマヌエル の原事実」が大前提とされているのではないのでしょうか。

（編集部註／この「益田つこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏が月間発行しているハガキ通信を転載したものです）

私が就職活動していたのは1978年のことです。いわゆる第2次オイルショックのため就職難でした。自分の行きたい道に進むために浪人して4年制の大学に行きましたが、それらがことごとく不利になりました。募集条件に、何年何月何日以降に生まれた方、とはつきり書いている会社もありました。

〈女のみちく就職編〉 | ⑦

モス堀渕敬子

高校の同級生だったある男子が、「同志社と関学に受かったけれど、就職のことを考えて関学にした」と言っていました。彼も一浪でしたが、男子の場合それはほとんどハンデにならないんですね。私には関学という名前も、体育会馬術部所属というのも機能せず、ことごとく不採用でした。会社選びにも失敗したかもしれません。英語を使えるところというのにこだわり過ぎたようです。

そこは都合で1年3カ月でやめました。なお、就職はとつていましたが、3年生になる直前の4月半ばに事故に遭い、3週間入院する羽目になり、その間授業には出られず必須科目の単位を落としてしまい、資格は取れませんでした。でも現在、自宅で英語を老若男女に教えているのでよしとするしかありません。

結局どこも

受からず就職

課の先生に相

談に行つて、ミ

ドリ電化(今の

エディオン)に勤

めるのですが、

◆ 酢酸兄さん

中嶋康雄

酢酸兄さんの劣情は余りある
喜びはいつも酸っぱいし
財布の中はいつもさみしい
電車の中では隣の女の胸の膨らみに
いかれそうになりながら
ふらふらとただふるえながら突っ立っている
時間は蠅のように飛びまわっているから
人糞にでもなつた気分だ
劣情の組織が分裂を繰り返し
兄さんに寄りかかってくるが
払いのけることもせずただにこにここと
とりあえず居眠っている電車の中は孤独だ
鼻の穴から死んだ祖母さんが細長い牛を連れて
出てくるので久しぶりに乳を搾って

瓶につめると埃が浮いているじゃないか
「このくそつたれのくそつたれめが」
埃が酸っぱい劣情にあおられて喜んでるじゃないか
埃が卵を産んでいるよ兄さん
邪な乗客がもつと邪な電車の広告に騙されて
腰を激しくふつているのはなんの付属品か
太陽はいつまでも電車の横で寝そべっている
鉄橋を走るとそれでもまだ川がきらきら光り
昔の過去に寄りかかり大相撲のことを思い出す
幼い酢酸兄さんは祖母さんと一緒にじつとテレビを見て
千秋楽の優勝賜杯の中に吸い込まれて
何もかもがうやむやにされて
劣情だけがやつぱり大切に大切に
「これから嫁をもらいにいくんだよ」
とネズミと祖母さんが湿ったポテトチップスの欠片を
頬張りながら尻尾の先が震え
「酔の物は体にいいんだよ」
と無理矢理のつべらぼうの優勝力士に食べさせる兄さん
電車が駅に止まったままだにやぐにや曲がりくねり
隣の女が電車の中とプラットホームの両方にある劣情

◆忘却

高木敏克

何を忘れたかもわからない忘却のまっ暗闇で
太い声が鈍器の重さで襲いかかる

さあ いえ お前は一体何を自白したのか
どうせ お前は死ぬのだから あきらめろ
少しでも楽に死にたいのなら はやく いえ
いったい お前は どれだけ自由で裏切ったのか
そこに われわれの生死がかかっているのだから
いえ われわれの何を どれだけ敵に売ったのか

何も覚えていないので 何もいつていません

何をいつたのか 思いだせないのなら 思いだせ
苦しいことなら忘れたいだろうが 思いだせ
そこに われわれの生死がかかっているのだから
いえ 相手にはうそをいつて騙したとか いえ
思い出すまで 苦しめてやるから 思いだせ

何も 思い出したくありません だからいえません

何か覚えているだろう なんでもいいから 早く いえ
思い出したくないというからは 覚えているはずだ

ただ 今いえることは 死と忘却の関係だけです
苦しみの中でできるのは 忘却だけです
たとえ 死んで生きかえったとしても

何も思い出せないのです
死にそこないは 何もかも忘れてしまうのです
わたしは 三回死にかけて 人生に三つの暗黒がある
もう 次に拾う命は残っていないはずだ
死は 永遠の忘却以外のなものでもない
もう 目覚めたくもないから さつさとやつてくれ

そうなのか 何も思い出したくないのなら そうしてやる
そういつて あいつは わたしを沈めて埋めた

もう 苦しみは 二度と思い出したくありません
思い出したいのは 津波を何も知らない人だけです

今日も 太平洋は キラキラと何事もなく輝いている

◆形の周りの風

大西隆志

さんかくの部屋には
自由がない
言葉は閉ざされている
名前も消され
日差しのなかの白い道や
満点の星のしたでの語らい
寒さの二月に鼓動が
鉄格子のなかで止まる

しかくい部屋に
故郷へ憧憬を込めた紙片を手にし
小さな声で吹きながら
机をたたきながらペンを走らせる
井戸のなかの季節を
天空の星への
プレゼントとして
大きな声で歌っていた

まるい部屋に
ふるさとの色が
花にやどっている
春夏秋冬へと流れ出す
詩人は一瞬に隠れた
見えるものと見えないものを繋ぐ
白骨の清冽さ
青い風の行方よ

編集部註／本作品は2020年2月10日に京都府宇治市の
「記憶と和解の碑」前で行われた「第8回日本・韓国・在日同
胞詩人共同 尹東柱詩人追悼の集い」のための朗読作品です。

神戸詞あしび

139-2020.02.16 大橋愛由等

去年暮れから二冊の通史を読んだ。金龍泰著『韓国仏教史』（春秋社）と末木文美士著『日本思想史』（岩波新書）である。

書かれた対象はいずれも悠久の歴史を重ねてきた事項なので、とても一冊の本にはまとまるものではないだろう。それを一冊の書物でまとめたのには、いくつかの断念（紙幅の都合で記述できない事項が少なからずある）が必要であり、内容も思想史と銘打ちながら思想の具体的なありように筆が伸びず教科書的な事項の羅列に終わる怖れがある。そうした陥穽を乗り越えるのは、「通史にまとめる」という著者の強い意思であろう。

今回は『日本思想史』について書きすすめることにしよう。思想史というディスクリールの面白さは、各時代の思想のありようが各専門家によって記述されていたものが、通史という共時態のもとで俯瞰してつなげてみると、あたらな知見が読者に提供されるといえることである。

その例として、真言宗の僧・覚鑿（1095-114）についての記述を挙げておこう。覚鑿は真言宗の中興の祖といわれる。真言宗のトップまで務めながら、緩みきった高野山を改革しようと断行したところ、激しい反発にあり、高野山から追放されてしまう。のちに根来寺（和歌山県岩出市）を本山とする新義真言宗の開祖となる。

この覚鑿は、かつてより注目していた僧であった。というのも、天台宗なら最澄以降、この国の仏教を変えていった僧を輩出したのに比べ、真言宗においては空海が突出して多くの実績を作っているが、それ以外となるとこの覚鑿をまづ注目したものの、それ以外私の視覚に入る僧は多くない。本書には覚鑿について二か所言及している。まず五輪の塔が普及するキツカケを作ったこと。今ではおなじみのへ地水火風空を意味する五つの形状のことなる石を積み重ねたこの石塔について『五輪九字明秘密積』を著することで理論づけし、以降の普及にはずみをつけたとされている。

通史が語りかける言説の 気づきと共時態の覚醒

二つ目は、覚鑿が生きている間にひとびとに広がっていた念仏・浄土思想について覚鑿がどのように対峙していたのかということである。それは密教側から念仏・浄土思想との整合性を試みたということである。

密教の実践では、行者の身・語・意のはたらきが瞑想の中で仏の身・語・意の三密と合致すること（三密加持）によって即身成仏が実現するとされた。しかし、それは決して容易なことではない。そこで覚鑿は、三密が不可能であれば、一密だけでもよいとしている。ここから一向専修の可能性が生まれる。語蜜だけを徹底するところに念仏が独立し、身蜜に専念するところに禅が展開すると見ることが出来る。このように見れば、密教がその後の実践仏教の源流になっていると考えられる。（『日本思想史』p62）

この記述は面白い。著者は法然、親鸞、栄西、道元などといった鎌倉新仏教と、旧仏教側の「対立」と見るのではなく、旧仏教側も、あらたな解釈を加えることで、「仏教界全体を巻き込んだ復興運動が新しい仏教の機運を起した」（同p62）と解釈している。ただこうした覚鑿の思想的到達点は、「新・旧仏教」の思潮が混在する当時の仏教／思想界においてどれだけの敷衍し影響力をもつていたのか気になるところであるが、こうした覚鑿の覚醒を思想史というディスクリールの俎上にのせることで、読者に新たな気づきを提示していることは評価したい。



高野山にある「覚鑿坂」高野山七不思議

<p>詩と評論 月刊「Mélange」Vol.150 神戸</p>	<p>2020年02月16日 通巻150号 発行所／月刊「Mélange」編集部 〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F 編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人） maroad66454@gmail.com 定価 600円(税別)</p>
---	--